

教育最前線

連載 43

●(株)ドリームモータースクール

高次脳機能障がいの方の運転復帰を支援するための安全運転教育をスタート



ドリームモータースクール教育研修課課長補佐の三浦剛基さんの指示に合わせて、Wさんは実車では様々な課題に取り組んだ

長野県長野市と須坂市に自動車教習所を展開する(株)ドリームモータースクール(本社・長野県長野市)は、身体が不自由な方を対象にした初心運転者教育を行うなど、長年にわたり障がい者の運転免許取得をサポートしている。そして昨年からは、脳梗塞などにより高次脳機能障がいとなった方が回復後に運転を再開する際の支援にも乗り出した。

同社取締役社長の吉村征之さんは「医師も作業療法士も、運転をさせて良いか判断する材料がなくて困っているという状況があります。そこに、私たち自動車教習所のような運転のプロの視点からアドバイスするというステップを加わえることで、解決できることがあるのではないかと考えました」という。そして、ホングの「自操安全運転プログラム」を取り入れるなど支援体制を整備した。

実 車で運転への影響の有無を確認

昨年12月16日、ドリームモータースクールを利用したのは昨秋に脳梗塞となり、長野中央病院で治療を受けていた患者のWさんだ。長野中央病院では、患者



コース内にあるいろいろな交差点を通過



パイロンにクルマの先端を合わせて停止

開始したことで、長野中央病院はWさんに受講を提案したのである。

長野中央病院・リハビリテーション科主任の倉坂美和さんは「Wさんは手足の麻痺はないものの視覚認知に障がいが残っています。サポートソフトでは問題がみられなかったのですが、実車で運転への影響の有無を確認することにしました」と話す。

講習を担当したドリームモータースクール教育研修課課長補佐の三浦剛基さんは、長野中央病院を通じてWさんの症状を把握した上で講習の内容を決めた。「病院から、Wさんの症状については比較

から医師に運転復帰に関する相談があった場合、医師からの指示に基づいて作業療法士が対応している。その際、患者の運転能力を評価する材料の一つとして、ホンダセーフティナビ(簡易型四輪ドライビングシミュレーター)の「リハビリテーション向け運転能力評価サポートソフト」を活用している。

このサポートソフトによる評価に加え、近隣にあるドリームモータースクールが高次脳機能障がいのある方の受け入れを



車庫入れでは後退時に周囲の状況を把握し、適切な操作ができているかを確認

的軽いもので、視覚的な部分に問題があると聞いていました。それが運転に影響があるものかどうかを確認しようと考えました。今回は、他の教習車両が走行している状況で運転したいというWさん本人の希望もあり、ペーパードライバー講習を受講してもらうことにした。

外周コースを数周して、Wさんが教習車両に慣れた後、助手席に同乗する三浦さんが指示を出していく。まずは、直線コースでは左右それぞれの白線にクルマを寄せて走る、コース上にあるパイロンにクルマの先端を合わせて停止するという課題。次は、合図を出すという操作を加えながら、信号交差点や無信号交差点の通過、クランクやS字コースを走行。さらに、パイロンスラロームや車庫入れにも取り組んでもらった。

講習の最後、三浦さんはWさんに「車庫入れなどで、空間を把握する能力には大きな問題は見られませんでした。ただし、クルマを後退させる時の速度をもっとゆっくりしたり、交差点を通過する際

県 全体でも自動車教習所と病院との連携をめざす

Wさんは「脳梗塞になって、以前と物の見え方が変わっているという自覚があります。そうした状態で運転しても大丈夫か不安でしたが、今日、受講して安心感を得られました。運転の再開に向けて、こうした仕組みが出来上がっているのは、たいへんありがたいです」と感想を語った。

長野中央病院リハビリテーション科長の中澤真由美さんは「患者様が個別に自動車教習所で指導を受けても、細かい挙動や反応まで見ていただけなことが多く、いろいろな課題を伝え、私たちが知りたいところも確認してもらえるので安心感があります。患者様にも受講を勧めやすいです」と、ドリームモータースクールと連携を深めていきたい考えを示した。

ドリームモータースクールの吉村さんは「今日は、第一歩を踏み出したところと。これからも、病院から相談があれば、積極的に対応したいと思っています。このような個別の連携だけでなく、長野県内の自動車教習所と病院が枠組みをつくって取り組んでいくことも重要で、そうした動きも既に始まっています」と、今後を見据える。



長野中央病院リハビリテーション科の中澤真由美さん(左)、倉坂美和さん(右) 由美さん(左)、倉坂美和さん(右)

※リハビリ加療中の方の運転復帰を車両訓練でサポートし、より安全に自由な移動を楽しんでいただくことをめざす安全運転教育プログラム

TOPICS

01 ●長野県警察本部とHondaとの交通安全協定締結 相互が蓄積している情報を共有し、交通事故対策につなげる

Hondaは長野県警察本部と交通事故防止対策の推進に関する協定を締結。昨年12月6日に長野県庁にて、同県警本部の北原久弘交通部長と、本田技研工業(株)安全運転普及本部の原田洋一事務局長が協定書に調印した。「SAFETY MAP」(8面参照)に表示される急ブレーキ多発地点デ

ータを同県警に提供するなど、道路利用者の安全確保に向けて相互に協力していくこととなった。

北原交通部長は「この協定を通じて今後、Hondaが蓄積している貴重な急ブレーキ多発地点データを提供していただけるようになりました。これをもとに、交通安全活動に有効に役立て、県民の安全・安心な暮らしを守りたい」と挨拶を述べた。また、原田事務局長は「官公庁との連携によって、交通事故の撲滅につなげていきたい」と語った。



本田技研工業(株)安全運転普及本部の原田洋一事務局長(左)、長野県警察本部の北原久弘交通部長(右)



TOPICS

02 ●神奈川県立相模田名高等学校 学校周辺の危険箇所を共有するために「SAFETY MAP」を活用

神奈川県立相模田名高等学校では、生徒がつくる交通安全隊が校内で啓発活動を担っている。昨年10月、交通安全隊の1年生が学校周辺の危険箇所を調べ、ヒヤリ地図を作成。交通安全隊では、これを生徒だけでなく、地域にも役立ててもらおうと、インターネットによる一般への情報発信を検討。この取組みに協力していた北里大学医療衛生学部准教授の川守田拓志さん（6面参照）が、生徒に「SAFETY MAP」（8面参照）を紹介し、これを活用してヒヤリ地図作成を通じて得た情報を投稿することにしたのである。「SAFETY MAP」の投稿機能を使って、約30カ所「みんなの追

加地点」として投稿した。

交通安全隊は11月17日に「杜のホールはしもと」（神奈川県相模原市）で開催された「平成28年度相模原地区交通安全高校生・PTA大会」（主催：神奈川県教育委員会、県立高等学校交通安全教育推進協議会、神奈川県立高等学校PTA連合会）で、取組みの成果を発表した。

交通安全隊の1年生は「私たちが投稿したことで、学校周辺の事故が1件でも減ればいいと思います」「小学生や中学生をはじめ、多くの人に見てほしい」「これからは危険と感じる場所を見つけたら、投稿しようと考えています」と話した。

昨年11月に開催された「平成28年度相模原地区交通安全高校生・PTA大会」で取組みの成果を発表



神奈川県立相模田名高等学校・交通安全隊の1年生の皆さん



開会の挨拶を述べる（株）レインボーモータースクールの佐竹正規代表取締役社長

昨年11月24日、ソニックシティ（埼玉県さいたま市）で「2016 Traffic Safety Forum in Maebashi」が開催された（主催：交通安全センターレインボー埼玉・和光）。このフォーラムは、交通安全活動に取り組む企業や団体を対象に事故防止の施策などの情報交換を目的に行われており、この日は企業・団体から約300名が参加した。

開会にあたり、主催する（株）レインボー

モータースクールの佐竹正規代表取締役社長と、来賓を代表して埼玉県警察本部の後藤秀明交通部長が挨拶を行った。

今年のテーマは「職場内の安全は、交通・労働・健康のトライアングル」。交通事故防止活動の好事例として、2つの企業の安全担当者が発表を行った。

ジョンソン・エンド・ジョンソン（株）日本法人グループ総務部の蒲博史氏は、同社内で「SAFE Fleet（安全運転）」を企業文

03 ●2016 Traffic Safety Forum in Maebashi 職場内の安全は、交通・労働・健康のトライアングル

化にするための取組みを紹介。1ヵ月ごとにドライブレコーダーに記録された分の動画データを分析し、それを社員の安全指導に活用している事例などについて述べた。

また、（株）本田技術研究所 二輪 R&D センター管理室安全衛生・CGブロックの吉川達也氏は「心（思いやりの心）・技（危険予測の技）・態（模範となる態度）」という社内の交通安全基本理念を説明。これを社員に実践的に体感してもらうために、交通安全センターレインボー埼玉で実施して

いる「二輪安全運転研修」「交通安全総合研修」の内容を紹介した。

事例発表の後は、順天堂大学大学院医学研究科の谷川武教授が「睡眠呼吸障害の早期発見・早期治療による安全向上と健康増進」というテーマで講演した。居眠り運転の原因にもなる睡眠時無呼吸症候群（SAS）の特徴や検査方法を解説。SASは治療が可能な病気であるため、職場における早期の発見と治療が重要であると訴えた。



ジョンソン・エンド・ジョンソン（株）日本法人グループ総務部の蒲博史氏



（株）本田技術研究所 二輪 R&D センター管理室安全衛生・CGブロックの吉川達也氏



順天堂大学大学院医学研究科の谷川武教授

04 ●2016年 Honda 安全運転普及本部 年末ご挨拶会 『事故ゼロのモビリティ社会』の実現に向けた取組みを強化

昨年12月2日、Honda 青山ビル（東京都港区）にて「2016年 Honda 安全運転普及本部年末ご挨拶会」が開催され、交通関係者約300名が参加した。

報告会では本田技研工業（株）の八郷隆弘代表取締役社長が「Hondaはこれまで交通安全に関しては、クルマ社会がかかえる交通事故や渋滞、高齢化にともなう移動の問題などについて、真摯に向き合ってきました。昨今話題の自動運転についても、業界と協調の上、交通事故ゼロを目標として関連技術の開発を進めています。交通事故の削減には技術の開発だけでなく、ルールづくりやインフラの整備、人々の理解促進といったことも忘れてはなりません。この点については官民の協力が今後さらに必要になるものと考えています」と挨拶。

続いて、本田技研工業（株）安全運転普及本部の原田洋一事務局長が、2016年の安全運転普

及活動の報告と今後の取組みについて映像を交えて紹介した。

最後に、来賓を代表して警察庁の井上剛志交通局長が挨拶。「交通社会に参加するすべての人の安全をめざすという崇高な理念に基づき、安全知識等をたくさんのヒトに伝える、安全にかかわるテクノロジーの開発、安全情報を伝えるコミュニケーションを推進する活動に尽力し、とりわけ各年代に応じた安全運転啓発活動の推進に積極的に取り組んでいることに感銘を受けました。今年、開発された幼児向けのプログラムは子どもにとって親しみやすく、交通事故防止を図る上で有効なものだと考えています。先進性・独自性のある交通安全活動を引き続き推進してほしい」と述べた。

報告会の後には、懇談会が開かれ、交通関係者の交流の場となった。



本田技研工業（株）の八郷隆弘代表取締役社長



警察庁の井上剛志交通局長